

愛がなければ

シリーズ・パウロ

第33回

パウロにとって「愛」とは

- パウロ書簡中、「愛」(アガペ)を76回使う
 - パウロの教えにおいて、「義」「信仰」「恵み」などと同じように重要なテーマである
- 愛は律法を全うする
 - 「互いに愛し合うことのほかは、だれに対しても借りがあってはなりません。人を愛する者は、律法を全うしているのです。」＜ローマ13:8＞

キリストによる完全な愛

- キリストの十字架は神の愛の啓示である
 - 「しかし、わたしたちがまだ罪人であったとき、キリストがわたしたちのために死んでくださったことにより、神はわたしたちに対する愛を示されました。」 <ローマ 5:8>
- キリストの愛は今も注がれ続けている
 - 「だれが、キリストの愛からわたしたちを引き離すことができましょう。艱難か。苦しみか。迫害か。飢えか。裸か。危険か。剣か。」 <ローマ 8:35>
- 私たちもキリストの愛を模範とすべきである
 - 「キリストがわたしたちを愛して、御自分を香りのよい供え物、つまり、いけにえとしてわたしたちのために神に献げてくださったように、あなたがたも愛によって歩みなさい。」 <エフェソ 5:2>

愛の重要性<1コリント13:1-3>

たとえ、人々の異言、天使たちの異言を語ろうとも、愛がなければ、わたしは騒がしいどら、やかましいシンバル。

たとえ、預言する賜物を持ち、あらゆる神秘とあらゆる知識に通じていようとも、たとえ、山を動かすほどの完全な信仰を持っていようとも、愛がなければ、無に等しい。

全財産を貧しい人々のために使い尽くそうとも、誇ろうとしてわが身を死に引き渡そうとも、愛がなければ、わたしに何の益もない。

愛とは<13:4-7>

「愛は忍耐強い。愛は情け深い。ねたまない。愛は自慢せず、高ぶらない。礼を失せず、自分の利益を求めず、いらだたず、恨みを抱かない。不義を喜ばず、真実を喜ぶ。すべてを忍び、すべてを信じ、すべてを望み、すべてに耐える。」

愛とは

- 忍耐強い:「長い」+「苦しみ」。「寛容」
- 情け深い:他人を自分のように感じる。「親切」
- ねたまない:他人の成功をねたまない
- 自慢せず:自分の成功をみせびらかさない
- 高ぶらない:いばった態度をしない
- 礼を失せず:不作法でみっともない
- 自分の利益を求めず:自己中心でない

愛とは

- いらだたず: すぐに不機嫌にならない
- 恨みを抱かない: 過去にこだわらない
- 不義を喜ばず、真実を喜ぶ
- すべてを忍び: あきらめない
- すべてを信じ: 信頼し続ける
- すべてを望み: 前向きである
- すべてに耐える: へこたれない

愛がないとは(罪とは)

短気であり、薄情(不親切)。嫉妬深く、何事につけて自慢し、威張っている。マナーが悪く、自己中心的で、すぐに不機嫌になり、昔のことにこだわる。

聖書は読まないがテレビは大好き。

すぐにあきらめ、不誠実で、後ろ向きであり、すぐにへこたれる。

<堀川寛訳>

愛は寛容音頭

愛は寛容 愛は親切

人をねたまず 自慢をしない

山を動かす ほどの 信仰があっても

愛がなければ何の値打ちもありません